

1. はじめに

生成文法理論に基づく言語獲得研究の理論的貢献の一つとして、成人の言語事実を基に提案された理論を母語獲得のデータに基づき検証することが挙げられる。例えば、言語間変異を規定するパラメータの存在や、機能範疇の主要部とその指定部に一致や認可関係が見られる場合など、言語獲得研究において検証が進められてきたと見ることができる (Hyams 1986 など)。もし検証の結果、妥当性が導けない場合は、その理論に再考を迫ることができるため、言語の理論的研究と言語獲得研究はその意味で有機的な連関があるといえるだろう。

本研究はそのような取り組みの一環として、日本語の理由を表す *wh* 付加詞が文末の補文標識「の」と共起しなければならないという現象に着目し、桑原(2011)で提案された理由を表す *wh* 付加詞の認可に関する統語理論の妥当性を日本語の母語獲得のデータを用いて検証する。

2. 理由を表す *wh* 付加詞と補文標識「の」の共起

桑原(2011)は、理由を表す *wh* 付加詞は文末の「の」とは共起できる(=(1a), (2a))が、疑問の補文標識「か」とは共起できない(=(1b), (2b))。このことは理由を表す *wh* 付加詞を用いる疑問文では「の」が必要であることを示している。¹

- (1) a. 太郎はなぜ怒ったの? (桑原 2011: 152, (3b))
 b. ??*太郎はなぜ怒りましたか? (桑原 2011: 152, (3a))

* 本研究は JSPS 科研費 16K16826 (若手研究 (B)) 『主語の格表示に関する統語理論の言語獲得からの実証的研究: 熊本方言を対象にして』, 研究代表者: 團迫雅彦) 並びに JSPS 科研費 24520547 (基盤研究 (C)) 『談話とのインターフェイスに基づく統語メカニズムの実証的研究』, 研究代表者: 西岡宣明) の助成を受けている。

¹ (i)に示すように他の疑問詞疑問文では「の」が伴わなくてもよい。

- (i) a. 太郎は何を買いましたか? / 太郎は何を買ったの? (桑原 2011: 151, (1))
 b. いつ東京に来ましたか? / いつ東京に来たの? (桑原 2011: 152, 注 2 (i))
 c. どこでその人に会いましたか? / どこでその人に会ったの? (桑原 2011: 152, 注 2 (ii))

- (2) a. 太郎は何をそんなに怒ったの? (桑原 2011: 152, (4b))
 b. ??*太郎は何をそんなに怒りましたか? (桑原 2011: 152, (4a))

このような疑問を表す *wh* 付加詞と「の」の共起関係を、桑原(2011)では精緻化された CP 構造(Force Top* Int Top* Foc Top* Fin)からの説明を試みている。これはカートグラフィーアプローチと呼ばれており、従来の単一的な CP 構造ではなく多層的な CP 構造を仮定することで、談話と関連する様々な統語現象を説明しようとするものである(Rizzi 1997 など)。桑原(2011)ではこれを日本語にも適用した構造を仮定するが、日本語は主要部後置型言語であるため、結果的に CP 領域についても文の右側に生起する構造になる。また、Rizzi (1997)と同様、これらの Top, Foc, Int は随意的な機能範疇であり、要素が現れなければ活性化が起こらず投射されないと仮定されている。この多層的 CP の中で特に問題の現象と関連する機能範疇は Int と Fin である。Int は理由を表す *wh* 付加詞を認可し、Fin は節の定性を決定する機能範疇である。桑原(2011)では、「の」は Fin の位置を占める機能範疇であり、それが文内に現れることで CP 構造が活性化するため、それに合わせて Int と Foc が投射される。このため、(1a)のような文法的な文では、最終的に(3)のように LF で「なぜ」が *wh* 素性を照合するために IP 内から IntP の指定部まで移動することで派生が収束すると分析される。

一方で、(1b)のような文では「の」がないため、(4)のように CP 構造が活性化せず IntP が投射されないことになり、*wh* 素性が照合されず非文法的になると説明される。

3. 言語獲得からの検証1：理由を表す *wh* 付加詞と「の」の発現

文には「の」が必ず含まれていなければならないという予測である。もし幼児期においても大人と同様の統語構造が成立するのであれば、幼児文法においても *wh* 付加詞と「の」の共起関係が存在するはずである。

本研究では、これらの予測を検証するために CHILDES データベース(MacWhinney 2000)を用い、一人の幼児発話(Sumihare, Noji コーパス)を縦断的に観察した。まず、疑問文として使われる「の」の初出は1歳11か月であった(「べっこ(=ポケット)あるの?」)。一方で、理由を表す疑問詞疑問文の初出は2歳5か月であった(「どうして波ぱちゃんぱちゃんちゅるん?」)。このように、「の」は理由を表す *wh* 付加詞を用いた疑問文よりも早く観察されることから、一点目の予測は正しいと言える。また、Sumihare では理由を表す *wh* 付加詞を用いた疑問文は合計152例であったが、その中で「の」が含まれた文は148例であった(97.4%)。ほぼ全ての理由を表す *wh* 付加詞を用いた疑問文に「の」が用いられていることから、二点目も予測通りの結果と言える。以上のように、桑原(2011)で提案された理由を表す *wh* 付加詞の認可に関する統語理論は言語獲得の観点からも妥当であると思われる。

4. 言語獲得からの検証2：理由を表す *wh* 付加詞とガ格の統語位置

上述のように、本研究の結果からも桑原(2011)で提案された統語理論は妥当性が高められたと言える。しかし、この *wh* 付加詞の生起位置に関しては桑原(2011)では元位置が IP 内とされており、そこから LF で *wh* 素性の認可のために非顕在的に移動するとされていた。これについても、言語獲得からの観点から検討を行いたい。

理由を表す *wh* 付加詞の生起位置に関する言語間変異を規定した *why*-parameter (Thornton 2007)によると、大人のイタリア語や、英語を母語として獲得する幼児は理由を表す *wh* 付加詞を Spell-Out 前に IntP に merge するというパラメータ値に設定すると説明されている。例えば、英語を母語として獲得する幼児は(5a)のように *why* 疑問文では主語・助動詞倒置 (Subject-Auxiliary Inversion) を起こさない。しかし、(5b)から(5d)のように、その他の疑問詞疑問文においては倒置が見られている。倒置の振る舞いに関して *why* 疑問文のみが異なるため、英語を母語として獲得する幼児は *wh* 移動ではなく、IntP に直接生成すると初期設定されていると分析される。

(5) 英語を母語として獲得する幼児の Subject-Auxiliary Inversion (SAI) (Thornton 2007)

- | | |
|-----------------------------------------------|-------|
| a. Why unicorns are pretend? | (3;1) |
| b. How did Tweetie get marked? | (3;0) |
| c. When will we big enough to climb up there? | (3;1) |
| d. Who was it that you was talking to? | (3;1) |

もしこれがパラメータのデフォルト値であるなら，精緻化された CP 構造を考慮すると，日本語を母語として獲得する幼児が発話する理由を表す *wh* 付加詞はガ格よりも前でのみ生起するはずである。

(6) [ForceP [IntP reason wh-adverbial] [FocP [FinP [IP NP-ga] Fin] Foc] Int] Force]

この予測についても CHILDES データベース(MacWhinney 2000)の同じ幼児発話(Sumihare, Noji コーパス)を縦断的に観察した。上述と同じく Sumihare では顕在的にガ格が現れている理由を表す *wh* 付加詞を用いた疑問文は 10 例観察されたが，その全てが予測通り，理由を表す *wh* 付加詞はガ格よりも先行していた(例：お父ちゃん どうして 電気が つかんの？ 3 歳 6 か月時点の発話)。このことは *why*-parameter が日本語でも大人のイタリア語や，英語を母語として獲得する幼児と同様の値で設定されているということを示している。さらに，桑原(2011)では理由を表す *wh* 付加詞が Spell-Out 前では IP 内に生成され，LF で IntP に非顕在的に *wh* 移動を行うとされたが，本研究の結果は桑原(2011)の仮説の妥当性については支持するものの，理由を表す *wh* 付加詞の基底生成の統語位置については IntP に直接生成されるという可能性を示唆した。

5. 結語と今後の課題

本研究では，理由を表す *wh* 付加詞と補文標識の共起関係についての統語理論を言語獲得の観点から検証を行った。その結果，概ね理論の予測する結果を得られたが，一部についてはその再考を迫る結果になった。このように統語理論と言語獲得研究との相互のフィードバックが得られる状況が今後も望ましいと思われる。しかし，今回の検証データは一人の幼児にとどまっており，また理由を表す *wh* 付加詞についてもさらなる特徴付けや検討が必要と思われる。

参考文献

- Hyams, Nina (1986) *Language Acquisition and the Theory of Parameters*. Dordrecht: Reidel.
- MacWhinney, Brian (2000) *The CHILDES Project*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery, *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281-338, Kluwer, Dordrecht.
- Thornton, Rosalind (2007) Why Continuity, *Natural Language and Linguistic Theory* 26: 107-146.
- 桑原和生(2011)「補文標識と Wh 句の共起関係について－理由を表す Wh 付加詞を中心に－」，長谷川信子（編），『70 年代生成文法再認識－日本語研究の地平－』，151-176，東京：開拓社。
- 野地潤家(1973-1977)『幼児期の言語生活の実態 I～IV』，広島：文化評論出版。